

農業経営の類型分化について

滝本 隆夫

(九州農業試験場)

TAKIMOTO, T.

Studies on the Diversification regard to the Types of Farming

1. 研究の目的

商業的農業への発展が著しい今日、農業経営の構造は地域的にも階層別にも、多種多様な形態をとりながら展開しているのが実状である。

本研究は、このような環境の中で、農業経営の構造の変化の様相、並びに類型別農家の性格を把握することによって、農業経営の構造改善、農家集団の組織化、さらには農村計画を具体的に進めていく場合の基礎的な資料としたい。

2. 研究の方法

類型別農家の性格を理解する方法として、① 動態的考察と ② 現状分析の二つの方法をとった。

前者では、対象地区全体の動向に対する個別経営の対応の仕方を、個別経営のもつ経営要因との関連でみた場合、いかなる要因を主軸に展開してきたかを考察し、後者では、主として類型別農家の収益性の確認、ならびに収益形成のメカニズムについて考察する。この場合、対象地区は、さしあたり一集落といった最小の単位を問題にしているので、大きな意味で経営方式を規定する社会経済的条件、自然的条件の個別経営に与える影響は同一だと前提する。

調査は、熊本県の代表的な普通畑作地帯である菊池平野を対象とした。

3. 考察結果の概要

〔I〕 経営耕地面積の拡大、縮小について

(イ) 経営の構造的变化を、経営耕地面積との関連でみると表1の通りである。すなわち、泗水町全体としてみた場合、50アール未満の階層をのぞき各階層(または規模：以下いずれも経営耕地面積広狭別にみた場合を指す)大体同率の減少を示しているのに対し、対象集落、福の本では、50~100アールの階層の極端な減少に対し、150アール以上の農家が増加している。

表1 耕地面積広狭別農家戸数

		計	~50a 未満	50 ~ 100	100 ~ 150	150 ~ 200	200 ~
泗水町	60年	1,320	259	281	340	299	141
	65年	1,226	217	263	324	291	131
福の本	60年	89	22	18	16	22	11
	65年	78	19	7	14	23	15
60年 100	泗水町	93	84	94	95	97	93
	福の本	88	86	39	86	105	136

これに関連し60年に対する65年の階層別農家戸数分布割合の変化については、対象集落では中規模農家が減少し大と小が増加しているが、これを泗水町の約30集落についてみると、経営方式、規模別農家構成のあり方、地目構成などの相違に関連しいくつかの形がみられる。

(ロ) 耕地面積拡大、縮小の実態を個別農家についてみると、拡大30戸、縮小16戸、離農したもの11戸で、総戸数89戸の内57戸の農家に面積の増減が起っている。

(ハ) 耕地面積拡大、縮小の状態を規模別にみれば

① 規模の大きな農家群ほど面積を拡大した農家率が多く、縮小した農家率は少ない。

② 200アール以上の階層では、拡大、縮小、増減なしの農家はほぼ同比率である。と同時に縮小した農家の縮小面積は僅かである。

③ 200アール以上の階層での面積縮小の実態は経営としての後退を示すものでなく、内部の拡大、つまり、Farm Business Sizeの拡大と結びついているのが実状である。このことは次の〔II〕と関連する。

(ニ) なお、こうした耕地面積拡大、縮小は、家族労働力構成(Family cycle)のあり方と相関がある。また、土地市場の十分発達していない現実においては、小作地による規模拡大の実態がタバコ

作を主体とした中規模経営に認められる。

〔Ⅱ〕 類型別農家戸数の変化について

(イ) 米麦作経営は28戸から14戸に半減し、その内容は60年には各階に分散していたものが65年には50アール以下に10戸、50～100アールに3戸と大部分下層に集中している。

(ロ) 酪 \oplus 米、酪 \oplus タバコ経営は60年には下層にまで分散していたものが65年には戸数が上層に集中すると共に多頭化の傾向が明瞭で、面積の拡大と集約化の傾向が最も強く表われている。

(ハ) タバコ \oplus 米、などタバコを主体とした経営は、農家戸数の変動も少なく、また戸数分布の状態にも大差は認められない。

(ニ) 農家戸数としては僅かであるが、土地利用との関係の少ない養鶏を主体とした経営は、当集落数戸の事例では、むしろ面積縮小による集約化の傾向が認められる。

(ホ) 以上のような農業経営構造変化の様相は、主要作目、ならびに家畜導入状況、現金販売金額別農家戸数の分布などの資料からも裏付けされる。

経営耕地面積の広狭と経営類型との関係を総体的にみれば、100アール未満の階層では養鶏 \oplus 米、米 \oplus 麦の経営が主で、100～200アールの階層にはタバコを主体とした経営が集中し、酪農経営は200アール以上の耕地面積の上に多頭化という形で成立を認めることができる。

〔Ⅲ〕 農業労働力の変化について

(イ) 家族農業労働力は一般的傾向と同様に、65年では、50～100アールの階層を中心に各層ともその員数は減少し、その内容は専従者の減少であり、補助労働力は比較的固定的である。

(ロ) 雇用労働力の変化は、各階層共臨時雇、手伝いといった形の労働が減少し、ユイ、手間替が増加している。

(ハ) 兼業化への動向は、65年では各層共兼業従

事者が増加し、兼業の上層化がみられるが、安定兼業従事者割合は減少している。

(ニ) 以上のように農業労働力構成の変化は、兼業従事者は増加し、家族農業従事者は減少を示し、その内容は専従者の減少で補助労働力は比較的固定的である。

農業労働力の減少は積極的には固定資本の投下の結果、資本の労働力に対する代替関係として生ずるものであり、消極的には農業生産力の低位性に起因するものであるが、当集落の場合、支配的には後者である。

また、農業が商業的農業への発展するにつれて補助労働力なるものは、本来的には雇用労働力によって補なわれるべき性格のものであるけれども、現実には雇用労働力は減少し、どちらかといえば古い形態のユイ、手間替といった労働力の増加となって表われている。

このような農業労働力構成変化の様相をみると、今後、ユイ、手間替労働をどう発展さしえていくかは個別的にも、また農村計画においても農業労働力の調達方法をめぐる一つの課題である。

〔Ⅳ〕 未整理の問題

(イ) 以上の考察は農業経営の構造的変化の様相を主として並列的に、全体的にみてきたものであるが、更にそうした動向をサンプル農家について具体的に追跡し、経営要因相互の関連性を見極め、その理由づけを明確にすること。そうすることによって経営構造の変化の実態はより正確に把握されよう。

(ロ) また、経営の集約化なり、耕地面積拡大、又は縮小さしてきた経営の効果がどの程度上げられているかを類型別、規模別に考察すること。

このことは、農業への資本投下(特に固定資本)の著じるしい今日、固定資本増投の結果、資本の収益率がどうか、生産性と収益性の関連はどうかといった諸点の検証としても重要であろう。

表 2 類 型 別 農 家 戸 数

	60年							65年							
	米	麦	酪	米	タバコ	米	タバコ	米	麦	酪	米	タバコ	米	麦	酪
～50a未満	7	0	0	0	2	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0
50～100	8	2	8	0	0	0	4	0	1	0	1	0	3	0	0
100～150	4	2	7	1	2	1	1	1	9	0	1	2	0	0	0
150～200	5	3	9	2	3	1	0	4	9	2	6	0	0	0	0
200～	4	0	2	0	4	0	0	4	3	5	3	0	0	1	1
計	28	7	26	3	11	2	14	9	22	7	11	2	3	1	1